

## 場面特性がおそろい行動の受け入れやすさに及ぼす影響

### 問題と目的

現代青年の同性の友人間では近年、「おそろい」という持ち物をそろえる行動が流行している。山田（2017）はこの行動を「おそろい行動」として注目し、日常的場面より非日常的場面の方が多く行われていることを指摘した。しかし、おそろい行動は、比較的新しい概念であることから、多くの研究はなされていない。そこで本研究では、周囲のおそろい実施者の数と、周囲の知人の数の2点に着目し、場面の特性がおそろい行動の受け入れやすさに影響をあたえるのかを検討した。また、おそろい行動には「負担感」という心理的機能があることが示されている（山田，2019）ことから、本研究ではおそろい行動における負担感も、場面特性により増減すると考え同時に検討した。仮説は以下のとおりである。周囲におそろいの実施者が多く、知人が少ない場面では、おそろい行動は受け入れられやすく、負担感は低くなるだろう。

### 方法

本研究では4つの場面を想定して調査を行った。2023年8月中旬に18歳から25歳の女性自認のある人を対象に調査を実施し、最終的な調査対象者は149名であった。質問紙の項目は、(1) おそろいの受け入れやすさ項目(3項目)、(2) 負担感項目(3項目)、(3) 高坂(2010)の被異質視不安項目(7項目)、(4) 場

面の整合性を確かめる項目(2項目)であった。

### 結果と考察

おそろいの実施者の数(多い・少ない)×周囲の知人の数(多い・少ない)の4場面において、分散分析を行った。その結果、おそろい行動の受け入れられやすさについて、おそろいの実施者が多く、周囲に知人が少ない場面が最もおそろい行動が受け入れられやすいことが明らかとなった。一方で、おそろいの実施者が少ない場面では、周囲の知人の多さは関係なく、おそろい行動が受け入れられにくいことが明らかとなった。また負担感については、おそろいの実施者が多く、知人が少ない場面が最も負担感が低いことが明らかとなった。また、実施者が少なく、周囲に知人が多い場面が最も負担感が高くなることが示された。

以上より、場面特性はおそろい行動の受け入れられやすさと負担感それぞれに影響を与えることが明らかとなった。このことから、単に友人関係の深化や、周囲への関係性のアピールのためだけでなく、周囲の人間が実施しているという状況に影響を受け、おそろい行動を行っていると考えられるだろう。また、場の規範性によっておそろい行動の受け入れ方や、受け取り方が変容する可能性が示唆された。したがって、おそろい行動について検討する際は、場がもつ力についても考慮する必要があると指摘できるだろう。

## 宗教行動と時間的展望および対人関係との関連 ——無宗教といわれる人々にとっての宗教行動——

### 問題と目的

日本では、お守り、お札、おみくじ、占いなど宗教にまつわる行動が多い一方、積極的宗教団体への所属は低い。本研究は日本人の宗教行動がどのような意味を持っているかについて研究する。

本研究では時間的展望と対人関係が宗教行動と関連すると考えた。時間的展望について、宗教を信仰している人々にとっては、宗教の教えの中で時間的展望に類するものがあり、宗教を信仰している人々の宗教行動は時間的展望と正の関連をすることが考えられる。一方、宗教を信仰していない人々の行う宗教行動（おみくじ、占いなど）は、過去や現在に関わる時間的感覚が短いと考えられることから、時間的展望と関連しないと推測される。対人関係については、金児（1997）の宗教性と対人関係について調査しているが、本研究は高井（1999）の対人関係尺度を用いて、新たに宗教行動と関連があるかについて調べる。宗教を信仰している人、していない人の両群の宗教行動が「閉鎖性・防衛性」と「他者依拠」という因子と負の相関関係にあると考えられる。

### 方法

Google フォームによる質問紙調査を行なった。その結果 18 歳から 32 歳の男女 113 名からの回答が得られた。このうち、最終的な分析対象者は 90 名であった。

質問項目の内容は、宗教団体への所属、宗教行動項目、白井（1994）の時間的展望尺度と石井（2015）の時間的連続性尺度内の「現在と未来の連続性」因子、高井（1999）の対人関係尺度であった。

本研究では、調査対象を宗教所属の有無によって宗教集団外群と宗教集団内群に分類した。

### 結果と考察

まず、本研究で使用した宗教行動の質問項目群について探索的因子分析を行なった結果、「縁起担ぎ」と「宗教的实践」の 2 因子構造が採択された。次に、宗教集団内群と外群に分けて、宗教行動項目と時間的展望、対人関係尺度間の相関係数を算出した。まず、宗教行動項目と時間的展望では、宗教集団内群において、「宗教的实践」と時間的展望のうち「目標指向性」、「過去受容」、「時間的連続性」の 3 つの因子との間に正の関連がみられた。また、宗教集団外群においては、「宗教的实践」と「現在の充実感」の間に正の関連がみられたほか、「縁起担ぎ」と「目標指向性」および「現在と未来の連続性」の間にも正の関連がみられた。以上より、現在から未来への間隔が短いと考えられる宗教集団外群の宗教行動でも、宗教行動と時間的展望との間に正の関連が見られた。このことから、宗教行動の過去や現在に関わる間隔は時間的展望に関連しないことが確認された。次に宗教行動と対人関係について、宗教集団内群では、宗教行動と対人関係尺度との間に関連は見られなかった。一方、宗教集団外群においては「縁起担ぎ」と「他者受容」との間に正の関連が見られた。以上より、宗教が行われている場によって、他者を受容するような動きが見られる可能性があることが確認された。

## 中学生の友人との学習活動における充実感に影響する要因

——自分と友人が持つ目標の一致に着目して——

### 問題と目的

友人との学習活動は、多くの生徒にとって経験のある場面である。友人との学習活動が生じる場面には、朝、授業の間の休み時間、放課後、家庭学習といった授業時間外もあげられる。授業時間外では、学習を行うことが必ずしも求められているわけではない (岡田, 2008) ため、様々な行動が起こりやすいと考えられる。授業時間外における幅広い行動を生起する動機づけの1つとして、本研究では目標に着目した。これらの場面において、学習効果を上げることを目指す熟達目標と、息抜きや気分転換をすることを目指す気分緩和志向の2つが見られると想定した。友人との学習活動場面において、自分と一緒に学習する友人が持つ目標はそれぞれである。自分と友人の持つ目標が一致する場合、対人的な制御適合理論が生じて活動そのものに対する価値が高まることで、友人との学習活動が効果的なものになると考えられる。

本研究では、友人との学習活動の中でも授業時間外に焦点を当て、制御適合理論における自他の目標の一致が友人との学習活動の効果にどのような影響をもたらすかを検討する。

### 方法

2023年10月上旬に、岐阜県内の公立中学校の普通科全学年を対象とした質問紙調査を実施した。最終的な調査対象は、128名であった。質問紙の項目は、速水他 (1989) による達成目標傾向尺度、及川 (2002) による気分緩和志向

尺度と気分緩和尺度、出口 (2011) によるグループ学習の効果に対する認知 (学力の向上因子)、それぞれの尺度の項目を参考に修正、また新たに作成し、計45項目であった。

### 結果と考察

熟達目標における友人との学習の効果である学習内容の深化を目的変数とし、自分の熟達目標と友人の熟達目標、自分と友人の熟達目標における一致度、および自分の熟達目標と自分と友人の熟達目標における一致度の交互作用項を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、自分が持つ熟達目標は、自分と友人の熟達目標の一致度が高い場合も低い場合も友人との学習の効果に影響を与えるが、一致度の高い場合の方がその影響は大きいことが示唆された。気分緩和志向における友人との学習の効果であるリラックスを目的変数とした場合、交互作用項は有意でなかった。

以上のことから、自分が熟達目標をもって友人と学習している場合、一緒に学習する友人も熟達目標をもっていれば、より友人との学習の効果を感じることができると考えられる。本研究から、対人的な制御適合は自分と友人の熟達目標の一致でも生じ、友人との学習面での効果をより感じるができるという、個人内の制御適合と同様の効果をもたらすことが示された。友人と学習活動場面では、自分と一緒に学習する友人の目標は何かを把握し、学習の方向性を揃えるとよいことが考えられる。

他者から否定されたくない人は自己主張できないのか  
——拒否回避欲求が非主張性へ影響するプロセスの検討——

### 問題と目的

他者から拒否されたくないといった欲求は誰しもが持つものであり、拒否回避欲求と呼ばれている (小島他, 2003)。拒否回避欲求は、自分の主張を抑制するような非主張的自己表現に正の影響を与えていることが示されている (高濱・沢崎, 2014)。しかし、高濱・沢崎 (2014) では、拒否回避欲求は非主張的自己表現の大きな規定要因ではないことも示されている。このことから、拒否回避欲求を持つ人の中でも、主張性が非主張的になる人とそうでない人がいると考えられる。

そこで本研究では、拒否回避欲求が非主張的自己表現の関係を弱める要因を認知の歪みに着目して検討することを目的とする。このことによって、他者から拒否されたくない、否定されたくないという思いを持つ人がアサーティブな自己主張をできるような研究を行うことを目指す。

### 方法

調査協力者は15歳から25歳の130名 (男性39名, 女性89名, その他1名, 回答しない1名)であった。平均年齢は20.34歳 ( $SD = 1.57$ )であった。質問紙の項目は、性別、年齢に関する質問のほか、小島他 (2003) の「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」の下位項目である拒否回避欲求の項目 (9項目)、玉瀬他 (2001) の「青年用アサーション尺度」 (16項目)、高濱他 (2013) の「非主張性尺度」 (12項目)、Covin et al. (2011) の「Cognitive Distortions Scale (CDS)」 (20項目) を使用した。

### 結果と考察

非主張性に対する、拒否回避欲求と認知の歪みの交互作用効果を検討するために、非主張性を目的変数とし、拒否回避欲求と認知の歪みを説明変数とした重回帰分析を行った。その際に性別を共変量として投入した。その結果、非主張性である主張に対する不安・後悔について、拒否回避欲求と認知の歪み (社会的な場面) の交互作用が見られた。単純傾斜分析の結果、認知の歪みが高い場合にも低い場合にも、拒否回避欲求が高いほど主張に対する不安・後悔は高まることが示された。また、認知の歪み (社会的な場面) 得点が高い場合と低い場合では、仮説に反して認知の歪み (社会的な場面) 得点が低い場合に拒否回避欲求が主張に対する不安・後悔に与える影響が大きいことが示された。

以上より、結果として、認知の歪み (社会的な場面) の高低に関わらず拒否回避欲求の影響が見られたことから、主張に対する不安・後悔を低めるためには、拒否回避欲求を低めることが重要であると考えられる。さらに、単純傾斜のプロットより、拒否回避欲求を低く持つ場合において、認知の歪みが高い場合の方が低い場合よりも主張に対する不安・後悔が高かった。そのため、拒否回避欲求を低く持つ者は、認知の歪みを低めることで、主張に対する不安・後悔が低まることが示唆された。拒否回避欲求を高く持ち、主張できないことに悩んでいる人は、他者からの見られ方を意識しすぎないことによって、拒否回避欲求を低めることが大切なのではないか。

# 自己卑下呈示動機が精神的健康に与える影響

## 問題と目的

他者とコミュニケーションをとる際、自分自身に関する情報を伝えるという自己呈示を行う。その中でも、他者に対して自己の否定的な側面を呈示したり、自己の肯定的な側面を積極的に呈示することを避けたりする行為を自己卑下呈示と呼ぶ。これまで自己卑下呈示と精神的健康の関連についての知見は挙げられてきたが、自己卑下呈示をどのような意図をもって行っているかを指す自己卑下呈示動機が精神的健康に与える影響については明らかにされていない。そこで、本研究では自己卑下呈示動機が精神的健康に影響する過程の中で相手からの反応や行動が関連していることを明らかにしていく。

本研究では、「自己卑下に対して相手から否定的な反応を受け取ることをねらいとする自己奉仕的反応希求動機は、他者から否定反応が多く返されるとき、孤立感を低減させる」、「会話を盛り上げることをねらいとする話題提供動機や、自分に親しみを感じてもらおうことをねらいとする関係希求動機は、ソーシャルサポートを促進し、ストレス反応を低減させる」という仮説を立てた。なお、ソーシャルサポートとは、身近な人々からの援助を指す。

## 方法

2023年9月から10月にかけて、Google フォームを利用した質問紙調査を実施し、19歳から54歳の男女152名の回答を対象に分析を行った。質問紙の項目は、(1)吉田他(2004)の

自己卑下呈示動機尺度(16項目)、(2)吉田・浦(2003)の自己卑下呈示への否定反応尺度(3項目)、(3)嶋(1991)のソーシャルサポート尺度(18項目)のうちの心理的サポート因子(3項目)、道具的・手段的サポート因子(3項目)の6項目、(4)大野(1984)の充実感尺度(20項目)のうち孤立因子(5項目)、(5)鈴木他(1998)のストレス反応尺度(18項目)のうち、抑うつ・不安因子(6項目)であった。

## 結果と考察

孤立を目的変数とし、自己奉仕的反応希求動機、否定反応、および自己奉仕的反応希求動機と否定反応の交互作用項を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、自己奉仕的反応希求動機から孤立に正の影響が認められたが、否定反応は自己奉仕的反応希求動機と孤立の間で調整効果をもたなかった。また、自己卑下呈示動機からソーシャルサポート、ソーシャルサポートからストレス反応にそれぞれパスを設け、パス解析を行った。その結果、いずれのパスも有意でなかった。

以上の結果から、自己奉仕的反応希求動機は孤立を高めること、話題提供動機および関係希求動機はソーシャルサポートやストレス反応に影響を与えないということが明らかになった。したがって、自己卑下呈示動機による精神的健康低減の予防策を考える際には、相手からの否定反応やソーシャルサポートが有効ではない可能性が示された。

## 懐かしさはセルフコントロールを高めるのか

### ——自己連続性に着目して——

#### 問題と目的

「〇〇したいけど、してはいけない」というような葛藤状態にあるとき、自分にとって望ましい結果になるように選択するためには、高いセルフコントロール力を持つことが必要不可欠である。セルフコントロールは、人間関係の構築や金銭管理、学業成績、健康など、日常生活におけるあらゆる場面に大きな影響を与えるからである（尾崎，2020）。そこで本研究では、セルフコントロールに影響を及ぼす要因を検討し、セルフコントロールが促進される過程を明らかにすることで、人生の満足度や幸福度を高める一助となることを目的とする。セルフコントロールを促進する要因としては、自己連続性とノスタルジアに着目した。

Blouin-Hudon & Pychyl (2015) や Hershfield et al. (2009) によると、現在と未来の自己連続性は、未来の自己のために現在の行動を調節するのに役立っていることがわかっている。そして、過去へのしみじみとした感情であるノスタルジアは、過去と現在の自己連続性を高め、未来への意識を強めることが明らかとなっている（津村，2015; Cheung et al., 2013）。これらのことから、ノスタルジアが現在と未来の自己連続性を高めることによってセルフコントロールを促進すると予測した。

#### 方法

2023年6月から10月にGoogleフォームを用いた質問紙調査を実施した。最終的な調査

対象者は154名であった。質問紙の項目は、セルフコントロール、現在と未来の本質主義的な自己連続性、物語主義的な自己連続性、ノスタルジアを測定する項目で構成された。

#### 結果と考察

パス解析の結果、ノスタルジアが過去と現在の連続性を高めることが示されたが、その他のパスでは有意な関連はみられなかった。そこで、現在と未来の自己連続性を群分けし、自己連続性の高さによるセルフコントロールの差を分散分析で検討したが、群によるセルフコントロールの有意な差は認められなかった。さらに、セルフコントロールを場面によってカテゴリー分けし、現在と未来の自己連続性との相関係数を算出したが、こちらも有意な関連は認められなかった。

以上の結果から、現在と未来の自己連続性はセルフコントロールに影響を与えないことが示された。ただし、測定項目の抽象度を統一させることによって、異なる結果が得られる可能性も考えられる。また、ノスタルジアを感じることで、過去と現在の自己連続性が高まることは再確認できたが、そこから現在と未来の自己連続性につながるとはいえないことが示唆された。よって、未来への連続性を高め、自分のためになる行動を増やしていくには、ノスタルジアを感じるだけでなく、過去と現在の自己連続性と現在と未来の自己連続性をつなぐ力が必要であるといえる。

# オタクとしてのアイデンティティが主観的幸福感にもたらす影響

## ——ヘルシーディペンデンシーの調整効果——

### 問題と目的

「オタク」とは、趣味などの事柄に熱中し、生活のリソースの多くを注ぎ込む人たちのことであり、彼らは「オタ活」をして「推し」を応援する。本研究では、オタ活によって形成されたオタクのアイデンティティに着目する。

「私は〇〇のオタクである」というアイデンティティが自らを何者であるかを表現できることによって、オタクは心理的にポジティブな影響を受けていると考えられる。一方で、オタ活には「推し疲れ」といったネガティブな影響をもたらす場合もある。オタ活がオタクにポジティブな影響をもたらす場合とネガティブな影響をもたらす場合の違いには、依存性が関連していると考えられる。以上のことから、本研究では、オタクとしてのアイデンティティを「推し ID」とし、推し ID が主観的幸福感にもたらす影響を検討する。また、依存性の傾向が、推し ID と主観的幸福感の関係を調整すると予測し、ヘルシーディペンデンシー（以下、HD）の概念を用いて、依存性の調整効果についても検討する。以下に本研究の仮説を示す。

仮説 1： HD の傾向が高い人ほど、推しとの適切な距離を保ち充実したオタ活をすることができ、推し ID が主観的幸福感に正の影響をもたらすだろう。

仮説 2： HD の傾向が低い人ほど、推しとの適切な距離を保つことができず依存的なオタ活をすることになり、推し ID が主観的幸福感に負の影響をもたらすだろう。

### 方法

18 歳から 25 歳を対象とした、Google フォームによる Web アンケート調査を 2022 年 7 月から 9 月に行った。その結果、170 名からの回答が得られた。質問紙の項目は、(1) 藤原他 (2012) によって作成されたチーム ID 尺度を基に作成した推し ID 尺度 (20 項目)、(2) 池田・磯崎 (2021) の HD と過剰依存に関する項目 (18 項目)、(3) 伊藤他 (2003) の主観的幸福感尺度 (12 項目) であった。

### 結果と考察

推し ID と HD が主観的幸福感にもたらす影響を検討するために、重回帰分析を行った。その結果、HD の傾向が高い場合には、推し ID の「認知・気づき」が主観的幸福感の「満足感」「自信」に正の影響をもたらし、「失望感」に負の影響をもたらすことが示された。

以上の結果から、推し ID によって青年期のアイデンティティの確立が促され、HD の傾向が高い人ほど、推しとの適切な距離を保ち充実したオタ活をすることができていると考えられる。青年期に自立しつつも他者を頼るとするのは難しい場合があると考えられる。しかし、「推し」という存在は身近な存在ではなく、現実の人間関係とは切り離して関わるのが可能であると考えられる。「推し」という享楽を提供してくれる存在に頼るという方法を取ることで、青年期でも他者に頼ることが可能になり、主観的幸福感を向上させることができると考えられる。

## 援助要請スタイルが援助者の切り替えと学校適応感に与える影響

### ——多様な人に相談するという選択——

#### 問題と目的

青年期は多感な時期であり、多くの悩みを抱えている。悩みを抱えた時、誰かに相談することは重要な対処方略である。このように他者に援助を求めることを援助要請という。その中でも、問題解決へと近づくために、相談相手を選ぶことは重要な援助要請過程である。そこで本研究では援助者の切り替え方略に着目する。

援助者の切り替え方略とは、援助要請を繰り返し行う際に複数の他者へと援助者を切り替えることである（古橋・五十嵐, 2020）。本研究では古橋・五十嵐（2020）の研究を拡張し、援助者の切り替え方略の規定要因として援助要請スタイルとの関連を検討する。さらに、切り替え方略が学校適応感に及ぼす影響についても検討する。

また、同じ青年期でも中学生と大学生では同じ援助要請行動を取るとは言い難い。ネットワークの大きさが異なるため、取れる選択肢も発達段階ごとに違いがみられるだろう。そこで、対象者を中学生と大学生とし、比較検討を行う。

#### 方法

2023年7月から9月に愛知県の公立中学校に通う中学3年生と大学生を対象に質問紙調査を行った。質問項目は援助要請の量、援助者の切り替え方略、援助要請スタイル、学校適応感を尋ねる項目で構成され、全58項目であった。援助者の切り替え方略を測る尺度については、古橋・五十嵐（2020）を参考に、5つの悩

みの領域について悩んでいる場面を、そしてそれぞれの悩みが一度の援助要請では解決しなかった場面を提示し、相談相手を回答するように求めた。

#### 結果と考察

援助要請スタイルが援助者の切り替え方略に与える影響について検討するため、分散分析を行った。その結果、援助要請スタイル間に有意な差はみられなかった。また、援助者の切り替え方略、切り替え方略と発達段階との交互作用項を独立変数、学校適応感を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、領域内の切り替えが学校適応感に負の影響を与えていることが示されたが、学校段階との交互作用は認められなかった。しかし、大学生の切り替え回数は中学生よりも有意に多かったことから、発達段階によって援助要請行動が異なる可能性が示唆された。

以上より、援助者の切り替え方略の個人差要因は援助要請スタイルでないこと、援助者を切り替えずに援助要請を行うと学校適応感を高めることが明らかになった。よって、ただ援助者を切り替えれば良いのではなく、援助要請者がどのようなサポートを求めているか、一度援助要請を行った時にどのようなサポートを得られたのかを考慮して、援助要請を促す必要があると考えられる。また、発達段階によって援助要請行動が異なることから、発達段階に合わせた支援の必要性が示唆された。

## 大学生の学習観が授業選択理由と学習への関与に及ぼす影響

### 問題と目的

大学全入時代が近づく今日において、大学生の多様化とともに「大学での学習」に対する目的意識は希薄化している。ベネッセ教育総合研究所（2022）の調査からも、大学生の学習態度は受身姿勢の傾向があると読み取ることができる。そのため、大学での学習そのものに対し自ら興味を持ち、深く学び続ける主体的・自律的な関与を促すことが重要である。

学習への関与に影響を及ぼす要因として、学習そのものの捉え方に着目した信念である学習観が挙げられる。学習観は人間の学習における行動・態度面に影響を及ぼす重要な要因であることが指摘されている（八木，1996）。本研究では、学習観の中でも、大学生の学習への関わり方との関連が明らかになっていない「学習のしくみやはたらきに対する考え方」を指す広義の学習観に着目する。また、本研究では、媒介要因として専門科目の授業選択理由にも着目する。授業選択は、大学生における重要な課題の選択の一つであり（梅本・中西，2010）、選択理由にも様々なタイプがある（牧野，2001）。大学生にとって身近かつ重要な選択である授業選択理由に着目することで、より実像に迫った形で大学生の学習観から学習への関与に及ぼす影響までのプロセスを捉えていく。

### 方法

大学2年生から4年生の198名を対象とし、2023年7月中旬から8月上旬にかけてGoogleフォームを用いた質問紙調査を実施した。質問項目は、大学の専門科目の授業における選択の

自由度、履修の有無および選択理由、大学生の学習観、学習アプローチ、学習の継続意志、動機づけ調整方略の興味高揚方略を尋ねる尺度で構成された。

### 結果と考察

対象者のうち、必修科目以外の専門科目の授業を履修中であると質問項目から判断した129名を最終的な分析対象者とした。パス解析の結果、大学での学習を自らの興味の追求や自己成長のためのものと捉えている大学生は、専門科目において自律的な理由による授業選択を行い、大学での学習を受身で捉えている大学生は、周囲からの影響や単位取得の容易さといった他律的な理由による授業選択を行う傾向があることが明らかとなった。また、自律的な授業選択理由は、深い学習アプローチの使用や学習の持続性と正の関連があることが示された。さらに、クラスター分析の結果から、大学生は複数の理由による授業選択をすることが示唆された。また、クラスターを独立変数とした分散分析の結果からは、周囲からの情報を興味のある授業を探すために活用することが、主体的・自律的な学習に影響を及ぼす一方で、単位を容易に取得できる授業を探すために活用する場合は浅い学習を促すことが示唆された。

上記の結果から、大学生の大学での学習に対する主体的・自律的な関与を促すためには、自らの興味の追求や自己成長のためといった、自律的で深い学習観を形成する支援が効果的であると考えられる。また、受身の学習観を低減させる支援の必要性も示された。